

中村武羅夫

夏目漱石氏

夏目漱石氏

漱石氏が「猫」を書いて、一足飛びに文壇一方の大将となり、お蔭で、金持ちだと云う噂のある東京朝日新聞社に抱えられて、大学の先生を止した時の告白文なるものは、同新聞に出たが、それを読んだ時、大いに痛快なことを云うお爺さんだと思った。その漱石氏に余が最初面会の光栄を得たのは、つい去る頃のことである。家は早稲田の南町で、屋敷は些つと広い黒い板塀で囲まれて居る。右の門柱に「夏目金之助」と楷書で認められた木の名

札が張ってある。門より玄関まで砂利を敷いて、歩くとじやくじやくと云う。格子戸の右の方に「木曜日の外面会謝絶」と云う紙の切れが張ってあった。破れて居る。

余の漱石氏を訪うたのは、夕方六時ごろで、初秋の日は既に暗らかった。案内を乞うと取次に出たのは、年は十五六、顔の丸い色の白い小がらな、小間違型の娘であった。辺りは仄かな夕暗みであつたので、その色の白い襟首から、水々しく美しかった。些っとお目にかかりたいと名刺を出すと、それをつやつやと白いなやかな手に受取って、茶の間の方にその姿は消えてしまった。消

えて行く後から見えた赤い帯と白いその顔が目に残ってぼんやり立って居ると、出て来られたのは漱石氏自身で、今、飯を食わねばならぬから、そこらでも散歩して二三分後に来てくれと言われる。余は仕方がないから、二十分後を約して、そこを出た。恰度夕飯前ではあり、そこらのお手軽へ入って腹をこしらえ、再び出掛けた。早速通されたのは、その書齋である。書齋と云っても、十五畳ぐらいの西洋間と、その隣りに十畳の日本室がある。

余は日本室へ通されたのだ。両方の書齋に大きな本箱

が並んで、中にはクロース金文字入りの本が一ぱい詰つて、ピカピカして眩しいぐらいだ。建具なども好いもので、殊にその机は何と云う木か知らないが、黒いつやつやして重そうな木である。有さすが繫は文壇の大家たる夏目漱石先生の書齋だけあると、実際つくづく感服してしまった。余のこれまで訪問した文壇の大家で、漱石氏ぐらい立派な家に立派な道具を使って居る人はない。兎に角偉いものである。座蒲団なども絹で、綿がぼこぼこ入つて居る。座ると尻がすべ迂りそうである。

漱石氏と相對して座った。

中肉中背で年は四十五六ぐらいであろう。顔は丸からず長からず、二重瞼で、目が一番好い。濃い口髯がある。そして白い痘痕が疎らに散った。鑄物のように正しく、きちんと膝を円く座蒲団の上に座って対談して居る長い間、殆ど身動きもせられない。声には艶も調子もなく、恰度蜘蛛の尻から糸が繰り出されるような調子で、云うことに行き詰ったり、つかえたりするようなことはなく、するすると誠に都合よく迂り出る。至って話が聞き易い。口は早くもなく遅くもない。これらが恰度好い加減と云うものである。話をせられる時には、大抵左の腕を右

の腋に持って来て、右の手でその濃い口髭をひねりながら、目は絶えず相手を見て、始終にここにこしなから唇を動かすとも見え、言葉は例の糸のように繰り出される。恐しく話の上手な人である。接して見て実に感じが好いと云って何もお世辞が好かったり、愛嬌があると云うのではない。寧ろ、不愛想である。若し漱石氏のような人が愛嬌なぞ振り蒔こうものなら、それこそ、不自然の極、厭味があつて虫ずが走る。お世辞も言わず、愛嬌もなくして、それで接した感じが好いのだから妙だ。

漱石氏に接した感じは、例えば古めかしい骨董を手に

し時のようなものである。金泊のピカピカした所も消えて、一体に何所となく、燻んで人間が時代離れして居る。齷齪として些の余裕のない現代人も、漱石氏に接すると、何となく煩わしい現代を忘れて、そう古く奈良朝時代にも遊んで居るような感じがして、気がのんびりと誠に気持ちが良い。これでは、成程祗徊趣味などを唱えるらしい人であると思った。

文章の上では随分皮肉を言われるようであるが、その皮肉は現代人の皮肉のように、毒々しい所がない。何時でも一時の滑稽的の趣きを含んだ皮肉である。大体人物

が皮肉ではない。対話中でも決して人を冷笑したり、人を嘲けるような皮肉は言われぬ。但し、理屈は随分色々といひぬくられる方である。一つ問題でも、様々な方面から理屈を引っ張り出して長々と言われる。そうした傾向は、単に座談のみではない、その作にもあるが、作物の中に於ての理屈をだらだら述べることの可否は別として、対談中はその理屈に興味を持って実に面白く聞かれる。つまり、座談のうまい故であろうと思う。

漱石氏は、長く座って居てもしびねが切れぬと見える。何時までたっても、少しもびくりとも動かず、きちんと

座って、表情も何も変わらず、能く話される。

余は、漱石氏に接して見るまでは、実に気取った、剛岸な、己れを高しとした、見るから小癩に触る人であるうと思つて居たが、實際接して見ると、決してそんな所は少しもない。それは、遠慮もなく思つたことはずんずん言われるが、そこが漱石氏の面白いところである。誰しも思つたことをつけつけ言われて見れば、好い気持ちはない。云う人に依つては小癩に触ることもあろうし、腹の立つこともある。然し、漱石氏は何程思つて居る所をつけつけ口及びその行為に現わしても、決して癩にも

触らなければ、腹も立たない。要するに人間が、くすんで骨董的であるから、従って人物にも厭味がないのであるろう、どうしても、吾々と同じ血が通って、同じ社会に活動して居る今の人間とは思われない。俳句の会にでも行ったり、お茶でも立てたり、囲碁でも打って楽しんで居るに似合ったお爺さんである。但し、それは年の上から云うのではない。感じの上から云うことである。

余は腹のむしやくしやしたり、気の苛つく時には、こう云う人の所へ来れば好いと思った。

日本文学電子図書館

現代文士二十八人

著者：中村武羅夫

制作者：宮澤一郎

出版社：日高有倫堂

明治42年7月10日 印刷

明治42年7月16日 発行

日本文学電子図書館